

被災地派遣レポート〈第63回〉

建設局西多摩建設事務所奥多摩出張所 船山雅行さん

1 はじめに

平成24年10月1日から同年12月31日までの三箇月間、岩手県沿岸広域振興局に赴任した。そもそも自分が東北地方出身ということもあり、何か直接的な支援をしたいと考えていた。テレビのニュース等では、復興の進まない現地の状況が報道されていた。平成24年1月の派遣職員募集の際、「これだ」と思い、積極的に希望した。派遣は10月からと決まったが、4月には新しい職場に異動となった。異動半年で派遣のため不在となることに、申し訳ない思いだった。派遣直前、上司に「こっちの事は一切気にせず、支援業務に専念しなさい。」と送り出された。この一言で吹っ切れた気がした。

2 現地の状況と業務内容

沿岸広域振興局は、その名のとおり岩手県の沿岸部を管轄する部署である。着任早々、現場を見て回った。被災から1年以上経過したこともあり、まちのなかの瓦礫は処理場への集積が進捗していた。更地状態となった市街地には草が生え、僅かに痕跡を残していた建物の基礎を覆い隠していた。まるで以前からこんな風景であったかと錯覚する程、まちの再生は進んでいなかった。それは、いわゆる土地問題だけではなく、津波からまちを守る河川港湾施設の復旧が遅れているためでもあった。一方、先発隊のご努力により、道路はほぼ復旧していた（市道・町道を除く）。車による移動に関しては、不便を感じることはなかった。

私が配属されたのは、土木部河川港湾課であった。まさに復旧が遅れている河川・海岸施設を担当する部署であった。私は、主に河川堤防や港湾防潮堤の復旧業務に携わった。これらの施設は、規模の大きさや種々の課題から、早期の復旧が困難であったことを知った。沿岸一体が約1m沈下していること、地元の貴重な収入源である漁業に影響を与えないようにすること、工事に先立ち不発弾調査が必要なことなど、工事の設計・施工には様々な調整が必要であった。このような状況の中、県庁（本庁）や漁業関係者との協議、工事監督、大規模工事の起工等、短期間ながらも充実した業務に携わることができた。

3 おわりに

派遣期間中に県職員の方が過労で倒れ、救急車で病院に搬送された。幸い大事には至らなかったが、県職員の負担が大きいことを改めて感じた。当然ではあるが、県職員や工事受注者の中にも被災者はいた。しかし、暗い顔見せず、明るく受け入れてくれる方々に、頭が下がる思いだった。自分がどれだけ被災地に貢献できたかは分からない。しかし、派遣最終日に「ありがとう」と差し伸べられた手に、来てよかったと感じた。復旧・復興の道のりは長い。一日も早く、安心して住めるまちの復活を願う。そして、不在期間中、担当業務を代行して頂いた現職場の皆様に、心より感謝申し上げます。



瓦礫のほとんどが撤去されて更地状態となった大槌町



地盤沈下で満潮時に水没する釜石港公共埠頭と物揚場